

変貌するスキー界の最前線で奮闘する者たち

喝采の舞台裏

Technique Championship 連載第1回

1994年3月9日から5日間にわたり、第31回全日本スキー技術選手権大会と、引き続き、第24回全日本デモンストレーター選考会が野沢温泉スキー場で行なわれた。来る1995年の第15回インタースキーへの前哨戦ともいえるこのふたつの大会は、日本のスキー技術の指導理論や実践の現状を映し出す鏡の役割を担う大会である。渡辺一樹ら、トップデモたちはそこで何を目標そうとしているのか。

文・志賀仁郎 写真・上田勉/編集部



第31回技術選を制したのは、2度目の出場のマーク・ガルシア（フランス）だった

第31回技術選は どう準備されたか

「技術選が変わった。」
野沢温泉で開催された第31回全日本スキー技術選手権大会の周辺から、そうした声が聞こえてくる。「日本でいちばんスキーのうまい

ヤツは誰か」を決めるイベントは、前回の尾瀬岩鞍から野沢に移って、大きな変革を遂げた。

何がどう変わり、誰がどうすべったか、その報告は、別の機会に譲るとして、ここでは新しい技術選が、世界のスキーの大きな流れのなかで、どんな意味をもつのか。そして、日本のスキーにどんなインパクトを与えるのかについて考察してみよう。

前回の第30回技術選を終えて、尾瀬岩鞍では、さまざまな意見が聞かれた。「こんなに易しい斜面で日本一と言ったって」という斜面に対する不満。「いったいあのジャッジは何なのか、あれでははじめから誰に何点出すかを決めておきかと思えないではないか」という審判員のジャッジについての疑問といった声が聞こえていたのである。全日本スキー連盟（以下、SAJ）の教育本部のなかで、次からの技術選をどうするかが論議されて、30年の歴史を積み重ねてきたこの巨大なイベントは、大きく改革されることになった。

技術選30年の経緯で 生じた5つの問題点

問題点は5つほどあったと思われる。
1、より難度の高い斜面の設定
確かに岩鞍での2回の技術選で使われた斜面は、急ヴェ（急斜面ウエーデルン自由不整地、総合滑降の2種目を除けば、競技用のバーンはよく整備され、初心者中級者でもすべれるような易しい斜面であった。「あんな易しいところをすべって日本一を決めるなんて」という不満は当然だったろう。
八方尾根で行なわれていたときのような難度をもつ斜面でやらなければならないという思いがSAJ幹部の間起こっていた。
2、出場者の絞り込み
予選、準決勝、決勝という日程の進行に従って、300名を超える出場選手の数を制限してはどうか。ジャッジの疲労を考慮し、公正を期するためにも強い要望が上がっていた。

3、審判員の資質の向上
ジャッジの視点の統一、公平さについての疑問に答えるためには、審判員を再教育する必要性が強調されていた。
4、種目の見直し
これらもつとも重いテーマであった。与えられた斜面を指示された技法ですべり、採点される従来の方式では、「自由なスキー技法を

縛り、個性を發揮することができない。それぞれのスキーヤーの資質を殺してしまう」という意見が多く出され、技術指定をはずすことが検討されていた。
5、外国人選手の扱いについて
「このままでは技術選は賞金稼ぎの外国人たちだけのものになってしまう」という感想が語られ、「このまま行けば日本人のスターの影が薄くなり技術選の人氣が落ちるのではないか」という不安も出ていた。外国人選手がどんなにいいすべりをしたところで日本人のスキー技法の進歩に何の役にも立たないとする不満も聞かれていた。

これらの疑問に答え、SAJは第31回技術選の新しい方針を打ち出した。競技委員長渡辺茂さんは、その要点を次のように語った。
1、ジャッジの技術評価の明確化を計る。そのためには、予選、準決勝、決勝とその人数を絞り込んで、それぞれの段階で技術格差の幅を狭めて、技術評価を効率化する。
2、状況対応、技術の質の高さを見るために多彩な条件設定を実施する。
このSAJの考え方は、地元野沢温泉スキークラブの周到な準備と、献身的な協力によって、予想をはるかに越えた大会を演出することにいった。

野沢温泉に準備された 画期的なバーン

野沢温泉スキー場に準備された斜面は、従来のどの会場と比較してもはるかに難度の高いものとなった。
競技種目は、予選4種目は、
1小まわり（中斜面不整地）
2小まわり（急斜面整地）
3大まわり（急斜面整地）
4総合滑降（中斜面不整地）
というように技術の指定はなく、大まわりか小まわりかが指示されるのみ。そして、演じるバーンはそれぞれ性格の違った斜面が用意されたのである。

は、エキスパートスキーヤーと呼ばれ、エキセントと呼ばれる上級者である。

しかしながら、その超上級コースに、やっとブルークができる程度のオジサン、オバサンが挑戦し、子どもたちが笑い声を上げながらすべり降りている。その姿は不格好だが、実に楽しげで、どこにも悲壮感のかけらもない。日本ではおおよそ考えられない風景なのである。

スキーを「かっこいいスポーツ」として様式美の世界に封じ込めた日本のスキーは、美しいフォーム、正しい技法を求めて、スポーツとしての奔放さを失なってしまっている。お行儀のいい美しいフォームのスキーは、いつのまにかスポーツとしての自由さを失ない、管理されたものとなっていったのである。

「技術選が変わる」。それが第31回技術選だった。そこから発せられる新しい日本のスキーは、より自由で個性的なスキーとなるはずである。形にとらわれず、もっとさまざまな状況にチャレンジする勇気をもたなければ、ヨーロッパと同じスキーは生まれてこない。

第31回技術選は、予選、準決勝、決勝のそれぞれ4種目、計12種目を4日間でこなすハードなスケジュールで、過酷な競技を終えた。そして勝者は男子では1位マーク・ガルシア、2位マイク・ファーニー、渡辺一樹となり、女子でも1位に4年連続のマテヤ・スヴェート、2位カチューシャ・プスニク、3位マリナ・キールとなり、男女とも外国人選手が上位を占めることになった。

この結果から、「ワールドカップから引退し、ワールドカップで通用しなくなった選手でも、日本のトップデモよりも上になれる。それだけ日本の技術水準が低いということの証明だ」と、冷たく言い放つ人もいる。

変革に動き始めた日本のスキースタイル

日本人のスキーについて深い理解をもっているオーストリアのフランツ・ホビヒラー教

授は、「日本人ははじめに美しいフォームを求め、次に正確な操作というものを学び、それから転ばない強さ、そして速さを求めているように見える」と語り、その回路はヨーロッパの人々とはまったく反対なのだ指摘した。とにかく初心者の段階からフォームにこだわり、美しいすべりの形を求める日本人のスキー観を教授は笑っていた。

そしてスキーは、まず速く、強く、そして正確にとその望みを高めていくスポーツだったのである。

日本人は雪の上で美しいフォームを求めるため、そのフォームですべれる斜面を探し、そこで反復練習するという習性がある。

標高差800以上のコースを一旦息にすべると言うようなスキーヤーを見ることは少ない。

途中で立ち止まり、そこでウエーデルンなどと呼ぶ日本人しかやらないコチャマゲスキーを繰り返して満足感を味わっている。

そうした風潮は、1級、準指導員といった上級者と呼べるレベルに入ったスキーヤーたちにも浸透しているのである。

技術選に技術指定があった日本のスキー界では、より奔放な、のびのびとした自由なスキーは育ちにくい。

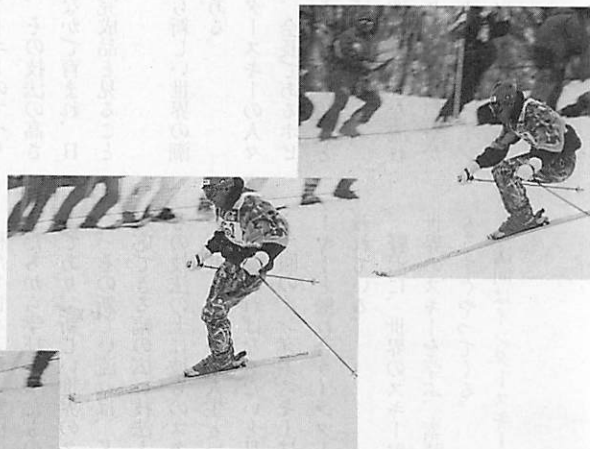
今回の技術選が、技術指定をはずしたことによって大きな変革を遂げようとしている。この変革は、日本人のスキーが様式美を追求した時代から、より自由に個性を発揮できるシチュエーションスキーへ流れを変えることを意味しているのである。

1年目の試みで明らかにになった特質

しかしながら、その第1年目となった第31回技術選では、その変化はまだ現われてはいない。

各種目の競技バーンのゴール付近に各県連のコーチ連中が集まって、それぞれのチームごとに作戦を指示している。「スタートからジャンピング系で6まわりし

1988年カルガリー・オリンピックでDH優勝という輝かしい戦績をもち、現役を引退後はコーチとしても活躍するマリナ・キール(ドイツ)。技術選初出場だが、女子総合3位となった。そのダイナミックなスキー操作は十分に現役時代を思わせる。ロングターンでは、女子4連覇を飾ったマテヤ・スヴェートをしのぐ、走りのいいスキーを見せてくれた



昨年、同じニシザワチームの渡辺一樹、佐藤謙を抑えて、総合優勝を飾ったマイク・ファーニー(アメリカ)。元ワールドカップ選手らしいスピードと状況判断力、日本のトップデモから学びとった豊かな表現力を合わせもち、非常に安定感の高いスキーを見せた。そのスキーを雪面から離さないコントロール能力は目を見張らせるものがある

